

(株)三信 東京都立川市

小ロット多品種対応のスタンスを貫き 印刷・表面処理技術を徹底的に追求!!

各種ネームプレートや銘板、パネルなどへの印刷や表面処理、写真焼付、エッチング、板金プレスなど、さまざまな加工技術を手掛ける(株)三信。志村信二社長にその強みと仕事へのこだわり、これからの展望を聞いた。



あらゆる材料と加工技術に挑戦してきた志村社長(前列左から2番目)、従業員の皆さんとともに

「当社は一貫して小ロット多品種対応を前面に打ち出し、お客さまのあらゆるニーズを満たすことに徹底的にこだわりつづけてきた」。(株)三信の志村信二社長はそう話す。事実、同社では現在、紙や樹脂、金属、ゴム、木材まで多種多様な材料によるネームプレート、銘板、パネルを手掛けている。材料特性に応じて加工技術を使い分けて印刷したり、「電気抵抗が必要」

「装飾品にしたい」「サビないようにしてほしい」「20年以上、文字が消えないように」といったニーズに合う機能を付加したりできるのが強みだ。

志村社長によれば、こうしたノウハウは「すべて創業から約半世紀にわたって現場で積み重ねてきた経験の賜物」だという。なかでもっとも思い入れ深い仕事は約17年前、ある大手加工機械メーカーの製品外装へ

の社名ロゴや製品名などの印刷を手

掛けたときのこと。先方の担当者

から「どうしても

コーポレートカラー

のインクが金属

表面にのらず、思

い通りの色合いが

出せない」という

相談を受け、ゼロ

からあらたなイン

クを独自開発し

たそうだ。具体的には「まず材

料と一般的なインクの相性を確

認し、その密着度合いを高める

ために薬品を混合して実験を繰

り返した」と志村社長。さらに

「複数色のインクをグラム単位

で混ぜ合わせたり、カーボネー

ト(熱可塑性プラスチックの一

種)のシートを裏打ちしたりと、

さまざまな手を使って色味を調

整し、ようやく3日かけて先方

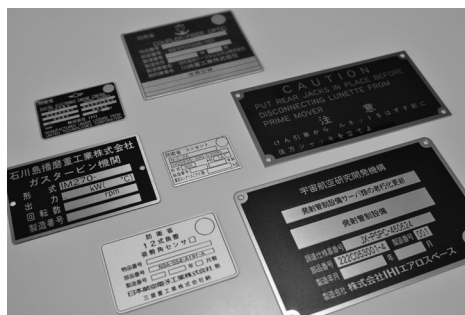
のイメージ通りのコーポレートの

カラーを忠実に再現することが

できた」という。

このように難易度の高いオーダーメイドの仕事を多数手掛けるうちに、いつしか同社は「困ったことがあったら三信さんへ」

「三信さんなら何とかしてくれる」といわれるようになり、口コミで紹介でドンドン取引先を増やしていったのだ。



三信の原点ともいえる銘板の数々。防衛省や宇宙航空研究開発機構などからの引き合いも。化学薬品などの腐食作用で金属を溶解加工し、凹部をつくるエッチング、アルミ表面に陽極酸化被膜を付してそこに文字などを焼き付けるアルマイト技法などによって、より長持ちするものをつくっている



①②手作業でのスクリーン印刷の様子。無地のパネルを一点ずつ版とともに型にはめて固定し、スキージ（硬質ゴム製の道具）で版を押し付けてインクをパネルに転写する ③印刷に用いる版の種類も膨大。ナイロンやテトロン、ステンレスといった素材の違いと、張り具合（テンション）によっても刷り上がりが異なる ④デジタル印刷のための装置 ⑤ネームプレートや銘板、産業機械のパネルのほか、こうした複雑形状・極小部品への印刷の依頼も多い。写真は補聴器のイヤホンの側面の小さな曲面に、品番を印刷した事例 ⑥小さな部品の曲面や凹凸部への印刷に適した「パット印刷機」 ⑦約15年前からは配電盤の製造も行っている。2019年に設立した八王子工場には、配電盤の筐体設計・製造、配線加工などの一貫制作体制が整っている

社長からのメッセージ

当社には現在、若手からベテランまで幅広い年齢層の従業員たちが揃っており、私はその全員を家族だと思っています。リーマンショックで仕事が激減し、月の売り上げの倍近い支払いがつついたときなど、これまでさまざまな苦境を一緒に乗り越えてきました。

もちろん家族だからこそ、厳しい指導も必要です。お客さまのあらゆるニーズにスピーディに応える体制づくりのため、とくに若手の育成には力を入れています。口をすっぱくして伝えているのは「何らかの不具合や不良が出たら、かならず工程の最初から順を追って作業の流れを確認し、原因を探るようにしなさい」ということ。安易にネットで調べたり、原因究明を怠るようなことは許しません。

コロナショックのダメージは4月までは微々たるものでしたが、5月以降はジワジワと影響が出てきています。これからも油断や妥協をすることなく、家族一丸となってモノづくりに取り組んでまいります。

株三信

本社・東京都立川市上砂町5-64-3

創業1972年

www.sanshin-co.jp

熟練の技である。

もちろん、現在も機械で自動化できない複雑な仕事が多々ある。同社の工場ではほとんどの従業員が表面処理や印刷を手作業で行っている。たとえば、加工機械の制御パネルカバーは設置する機械のさまざまな部品に合わせて形状が複雑になっているので、通常の印刷機では大量に印字することができない。そこで、上の写真のように一点ずつ人の手でスクリーン印刷を行うという。しかも「文字が非常に小さく細かいため、作業者の力のかけ具合が一定でなかったり、動きにクセがあったりすると仕上がりがブレてしまう。だから高品質を保つために完璧に安定・標準化した仕事が必要だ」という。まさに「求められる」そうだ。まさに熟練の技である。

施すメッキはより低コストな

さらに、同社の営業は例外なく表面処理、印刷、板金プレスすべての現場で5〜8年経験を積んだ従業員が務めるというから驚きだ。取引先から必要な仕様が書き込まれた図面を見せられたとき、現場で経験を積んでいないと「この部分は当社のこの技術で対応します」「ここに施すメッキはより低コストな

当然、こうした技術を支えるのは人材であり、その育成には時間をかけている。「指示された通りの仕様でスクリーン印刷を行えるようになるまでに最低で3カ月から半年、顧客ニーズに応じてインクや版を手配し、進行管理まで含めてすべてを主導するとなると5年は経験を積まねばならない」と志村社長は話す。

ほしい。

以前にも増して製品のライフサイクルが短くなり、印刷や表面処理でもより高度で複雑化した技術が求められる、部品も微小化・精密化の一途をたどっている。だからこそ、当社のような小ロット多品種の仕事に手作業で取り組んできたモノづくり企業のノウハウが生きて」と志村社長。これからの全社で技術力の向上と発展を目指して

の十分です」といった具体的な提案やアドバイスができないからである。「無理です」「できません」を一切いわず、お客さまの難題をどうクリアするかをつねに考えるのが、当社の創業以来のモットー。これを現場も営業も貫いてきたからこそ今がある」と志村社長は胸を張る。